

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 加藤耕一

本学位請求論文は、サン＝ドニ修道院の献堂からロマネスク期のシャルトル大聖堂の火災までの約50年間における司教座教会の形態的特性とその建設に関わる当時の社会状況を分析することで、後にゴシック様式と称されることになるフランスにおける建築様式の成立過程を考察するものである。

本研究は、序論と2部の本論、および結論から構成される。序論は先行研究を概観し、本論文を位置付けるものと言える。第1部は、初期司教座教会の形態的特徴を論じるものであり、特にモノリスの添柱の使用法に着目するものである。第2部は司教座教会を生み出した社会状況の分析、具体的には王権とコミュンとの関係を論じるものである。結論は、第1部、第2部で得られた知見を総合し、その結果を整理するものである。

第1部第1章ではサン＝ドニ大修道院と8司教座教会のデザインの特徴およびそれぞれの影響関係を論じている。その結果、当時に建設の始められた司教座教会がイル＝ド＝フランス地域よりも北に存在すること、および、トゥールネ大聖堂の影響が大きいことを論証している。この論証は、これまでのイル＝ド＝フランス地域と関連づけた説明に修正を迫る知見を提供するといえる。

第1部第2章では、初期ゴシック大聖堂に見られる支柱に見られるアン・デリと呼ばれるモノリスの添柱に着目し、その使用のあり方をサン＝ドニ修道院と8司教座教会について分析している。モノリスの添柱の使用そのものの指摘は既知である。しかし、それを、系統立ててゴシック様式の大聖堂について論じるものは少ない。また、これに着目する先行研究としてボニを挙げることができるが、その関心の中心はイギリス初期ゴシックへの影響であり、フランスにおけるゴシック様式の成立過程を論じるものとはいえない。この意味で本学位請求論文は、フランスにおけるゴシック様式の成立過程に関して新たな見方、方法を提供するものと言える。

第1部第3章では、添柱と支柱や壁面に見られるコーニス等の周辺部材との関係に着目し、聖堂のデザイン原理というべきものに迫っている。その結果、ラン大聖堂において、添柱を繋ぐリングとコーニスの一致が見られ、この意味においてラン大聖堂は一貫した水平分割に基づいていることを明らかにしている。更に、ラン大聖堂以外の初期ゴシック大聖堂においては、そのような明快な水平分割が見られないことを明らかにすることで、シャルトル大聖堂以降の古典期大聖堂に見られる一貫した水平分割がランからの強い影響であると結論づけている。ゴシック様式のデザイン原理として垂直性を指摘する研究は多いが、その水平分割の一貫性の有無について詳細に論じたものは少ない。この意味で、本論文が明らかにした水平分割の一貫性の存在とその起源がラン大聖堂にあるという指摘はゴシック様式の成立に関わる重要な発見と言える。

第2部第1章では先行研究で指摘されるフランス王権と初期ゴシックの関係について論じている。王権からの資金援助の観点から分析し、初期ゴシック時代の王であるルイ7世からの資金援助はなかったことを明らかにすることで、王権とゴシックとの強い結びつきはないことを論証している。

第2部第2章では、コミュニオンと初期ゴシックの関係について論じている。この関係も従来の研究に散見されるものである。しかし、コミュニオンと初期ゴシック聖堂の建設が同一都市に見られるものの、現時点での史料からは直接的な影響関係を示すものが存在せず、したがって、コミュニオンと初期ゴシック聖堂の密接な結びつきを史料から断定することはできないと結論づけた。この論証は、史料の少なさもあって、必ずしも十全とはいえないと判断される。しかし、少なくとも、コミュニオンとの結びつきが単純には受け入れられるものではないということは明らかにしているといえよう。

第2部第3章ではラン大聖堂の建設をとりあげ、当時の社会背景との関係を論じている。この章は、第1章、第2章に見た王権との関係、コミュニオンとの関係をラン周辺という特殊な地域において例証するものといえる。

主としてギベール・ド・ノジャンの『回想録』を見ることで、そこに王権の乖離が見られることを論証し、またコミュニオンの存在が司教にとって必ずしも資金調達には有利には働かないものであることを明らかにしている。また、ランとトゥールネの両参事会を兼任する人物が、多数存在したことを明らかにした。この発見は大聖堂間の影響関係を支える人的要因と考えられ、これについての今後の研究がまたれる。

以上、本研究は、添柱という部位の使用法に着目することで、初期ゴシックにおける新たなデザイン特性を明らかにしている。なお、この部位の使用法に着目したフランスにおけるゴシック様式の成立過程に関する系統立てた分析は、先行研究には見られないものである。その成果は、フランス初期ゴシック様式の成立過程に関する新たな知見を提供するだけでなく、ゴシック研究に新たな方法を提示する優れた業績といえる。

また、第2部では、従来の研究で指摘された王権やコミュニオンと初期ゴシックの関係について、少なくともこれまでの指摘には無理があることを明らかにしたいえる。また、大聖堂間の影響関係の人的要因として、複数の参事会を兼務する人物の存在の可能性を示唆することに成功している。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。